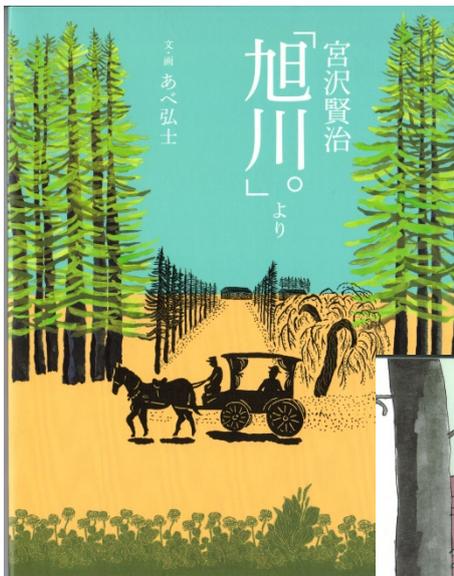


宮沢賢治「旭川」

植民地風のこんな小馬車に
朝はやくひとり乗ることのたのしき
「農事試験場まで行って下さい。」
「六条の十三丁目だ。」
馬の鈴は鳴り馭者は口を鳴らす。
黒布はゆれるしまるで十月の風だ。
一列馬をひく騎馬従卒のむれ、
この偶然の馬はハックニー
たてがみは火のやうにゆれる。
馬車の震動のころよき
この黒布はすべり過ぎた。
もっと引かないといけない
こんな小さな敏捷な馬を
朝早くから私は町をかけさす
それは必ず無上菩提にいたる
六条にいま曲れば
おゝ落葉松 落葉松 それから青く顫へるポプルス
この辺に来て大へん立派にやってゐる
植民地風の官舎の一ならびや旭川中学校
馬車の屋根は黄と赤の縞で
もうほんたうにジプシイらしく
こんな小馬車を
誰がほしくないと言はうか
乗馬の人が二人来る
そらが冷たく白いのに
この人は白い歯をむいて笑つてゐる。
バビロン柳、おほぼごとつめくぎ。
みんなつめたい朝の露にみちてゐる。

大正12年8月2日 樺太までの旅の途中の汽車の乗り換えの為、朝4時55分旭川駅の降り立った宮沢賢治。小馬車に揺られ6条13丁目までの往復、わずか7時間での滞在であったが、「明るく開けた街が、妹を前年に亡くし、沈んでいた賢治の心を救ってくれたようです」「旭川に賢治が慰められたことは、町の財産だと思ふ」と、旭川と賢治の関わりを紹介した「梯 久美子」氏が当時の心情を推測しています（2020/8/1 北海道新聞朝刊より）

2003年、東高の創立100周年の記念行事として、賢治の詩「旭川」を刻んだ文学碑が正門横に建てられたそうです。



また、西高17期の絵本作家「あべ弘士」氏も、この詩に着想を得て絵本を上梓しています。

軍都ながら明るくモダンな雰囲気を持つ街並み、ポプラ並木や鳥声など、賢治が感じた旭川の模様を描いてくれています。

ぜひ、一度ご覧ください。

